梵鐘

田中健太郎

「お腹を開いてみましたが
何もできずにまた閉じたのです」
そう告げた若い医師の
白い背中を叩いて
「心配ないですよ」と笑ったのは
患者の方だった

過ちを数えるな
鐘の音が遠く聞こえるたびに
忘れられない傷を
ひとつずつ空へ放とう

木漏れ日を浴びながら
嶮しい巡礼道を駆け上って
山腹の巨石にしがみついた

僕はこの世に何も残さない
僅かに許された
小さな流れも自ら絶とう
生まれてしまった事への
微かな復讐として

山寺の鐘が鳴る
癒えることのない病ならば
せめて苦しみが少ないように
消えることのない痛みならば
せめてひとときも忘れられるように

愛する人が
菜を刻む音で目を覚ます
あと一秒でも長く生きられるのなら
そこには無限の未来がある
山に祈りの鐘が響く